改築された鹿島神社（平成 12 年５月）

と呼ばれていた。

毘沙門堂に祀られていた毘沙門天は高さ三尺の木像で、安置当時は彩色が施されていた。

神宮寺が廃止されてから後、勧請の過程は不明であるが、※武甕槌命を勧請して鹿島神社と名称を変更した。

鹿島神社の本宮は鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）であり、同社の創建は、神武天皇即位年の皇紀元年（660BC）といわれている。神代の昔、武甕槌命は天孫降臨に先立って、香取神宮（千葉県香取市香取）の祭神である経津主命と共に出雲国に降り、国土献上の交渉に大功を樹てられた。

古くからこの地方一帯は、藤原鎌足の鹿島での出生伝もあり、中臣氏との関係も深い。大和朝廷の日本統一に際しても、武甕槌命の神威はしばしば発揚せられた。

都が平城京に遷されると、藤原氏は武甕槌命を勧請して春日大社の第一殿に祀った。延喜式では名神大社に列なり、常陸国の一宮と信仰され、明治になって官幣大社に列格し、常陸国第一の名社となった。

また、武甕槌命は武道の神としても有名である。そのため 鹿島神宮周辺は武芸が盛んとなり戦国時代の剣豪で新当流の開祖塚原卜伝を生んでいる。又、境内の鹿園には奈良の春日大社から譲り受けた鹿が放たれている。

当社の鹿島神社は、屋根の破損及び全体の老朽化により、平成十二年五月に改築された。

神宮寺が廃止されてから、社名や祭神変更が既に行われている事から御堂形式を改め、規模を縮小して神社建築の流れ造りとした。

石製の台座は有限会社坪井石材、社殿の製作は有限会社井上社寺工業があたり、垂木その他の部材は伊勢神宮御正殿の古材を使用した。

鹿島神社は古くから、宮崎地区の氏子で管理され祭典も行われて来ており、現在もその風習は続いている。

祭典は例祭と初寅祭が行われている。例祭は旧暦九月十四日・十五日に執行され、当日は幟を立て、十四日の夕刻から蝋燭で明かりをとり、お籠もりが行われていたが、現在は祭日も不定期となり、お籠もりも行われていない。初寅祭は一月の初寅の日に幟を立て行われている。

武甕槌命

伊邪那岐神が火の神である迦具土神の御頸を斬り給うたとき、御剣のツバ際にほとばしった血から生まれた神。

古事記では樋速日神の次ぎに生まれた神であり、建御雷神と記されている。

「建」は猛々しい。「甕」は厳めしい。の意で、何れも雄々しい意味が込められている。

金刀比羅神社

東太田家文書によると、文政元年（1818）造営とあり、大己貴神（大国主神）を祀る。社の中には金比羅大権現と彫られた石がある。

金刀比羅神社の本社は金刀比羅宮（香川県仲多度郡琴平町）である。金刀比羅宮は大物主神（大国主神）を主祭神とする神社であり、特に海上安全に霊験があるとされ、漁業関係者や船員などにより信仰されている。

もとは、象頭山金毘羅大権現と称し、本社の社地にあった松尾寺の守護神としてまつられていたものである。

金毘羅とはインドのガンジス川に棲息する鰐が神格化され、水にかかわる神として（クンピーラ Kumbhira）と呼ばれた事が語源のようであ

金刀比羅神社

る。

この鰐神は竜王あるいは海神として雨乞いや海難祈願にこたえる善神とされ、それが日本に渡り金毘羅大権現となった。

当社の金刀比羅神社の社殿下には丸い石が置かれており、その石を撫でると聡明になる謂われがあり、密かな信仰者がいる。

稲荷神社

備中誌によると、性徳院（倉敷市中庄）の預かりとなっていたが、寛文六年（1666）頃から神社で奉仕する事となったとされる。また、都窪郡誌によると、池田大学の家来の高田宗竹が、鎮守として祀っていたが、正徳年間（1711～1716）に当社の末社となったとされる。

祭神は※倉稲魂神で五穀豊穣や食を司る神である。

稲荷神社は全国に約三万五千社あり、諸神の内では最も多い。本社は伏見稲荷大社（京都市伏見区深草藪之内町）である。

稲荷神社

倉稲魂神（宇迦之御魂神）の神名の由来は、宇迦は食と同じ意で、食物の意味であり、「稲に宿る神秘的な精霊」という意で、五穀、食物を司る神とされる。また、稲荷は「稲生り」が約音便によってイナリとなったが、その神像が稲を荷っているところから「稲荷」の字をあてたとされている。

我が国は、往古から農業国で水田に稲を作り、米を主食としていたから、深く農耕神を信仰し、これが自然に稲荷信仰と結びついたと考えられる。

平安時代に入り、稲荷神社は東寺の鎮守となった事により全国に広く伝播し、初午などには、人々が群参する状況となった。

中世から近世にかけて工業が興り、商業が盛んになると、稲荷の神格も農耕神から殖産興業神、商業神、屋敷神と拡大し、「衣食住の大祖、万民豊楽の神霊」と仰がれ農村だけでなく、大名、町家の随所に稲荷神が勧請されるに至った。

稲荷とキツネの関係は祭神の一名であるミケツカミとキツネの古名「ケツ」との音通から三狐神（ミケツカミ）の字をあてたとされる。

倉稲魂神

古事記では宇迦之御魂神と記され、須佐之男命と、神大市比売命の御子と記されているが、日本書紀では伊弉諾尊と、伊弉冉尊の御子であるとしている。

倉稲魂神は穀物霊の神であるが、特に稲に宿る精霊神として、全国の稲荷神社の祭神となっている。その他の穀物霊の神としては、保食神、豊受大神、御食津神、大宜都比売神、豊宇賀能売神、若宇賀能売神などが上げられる。

神功皇后宮

祭神は息長足比賣命（神功皇后）と、大鷦鷯命（※仁徳天皇）と玉依毘賣命の三柱を奉斎している。

社殿内に「明治三年八月一日末社神功皇后宮奉斎・祭日四月十五日」とある事から、明治になってから新たに祀られたものと思われる。

また、神社明細書及び都窪郡誌には境内神社

神功皇后宮